



裏山より日の出を拝す

龍谷院たより

発行所 龍谷院
茨城県東茨城郡
城里町下阿野沢1509
TEL 029-289-3108
FAX 029-289-3025
編集人 蘭部 義光

新年を迎えて

住職 蘭部 義光

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

昨年中は何かとお世話になりました。特に龍谷院の行事であります施食会・ゴルフ大会・開山忌・節分会等にご協力をいただき感謝申し上げます。

今年は第五番の干支辰年です。動物におき替えて龍の年です。禅宗では仏道修行の守り神で龍神と言います。又、修行僧は必ず龍天軸を掛け修行の無事を祈ります。龍谷院の龍の文字です。この寺の名称も「龍が地中より出て寺を建てるよ

うに」と示された縁起があります。龍の背中に乗り上昇するように希望をもって生きることを願うものです。

去年は東日本大震災、福島県原発事故に見まわれ大変な一年でした。まだまだ復旧、復興には時間が必要かと思えます。一日も早い復旧がなされます様お祈り申し上げます。

今年は平穏な日々の生活が出来ますことをただ祈るばかりです。そして檀信徒の皆様にとりましても良い年でありますようご祈念申し上げます。

新年のご挨拶

総代 加藤 盛一



新年あけましておめでとうございます。檀信徒の皆様には、輝かしい新年を迎えましたこととお慶び申し上げます。

日頃は、菩提寺の護持運営につきまして、多大のご協力をいただき、厚く御礼申し上げます。

昨年は、未曾有の激震が大地を揺るがす震度七、M9の東北関東大地震が発生し、甚大な被害を受け復旧最中、九月には台風十五号が本県を直撃し風水害による被害が発生、自然災害の恐ろしさに、再考させられました。幸い、菩提寺龍谷院内外につきましては、最少の被害で済み安堵いたしました。

尚、菩提寺の境内美化活動として、二度にわたり、役員の方々に作業奉仕を頂き、花の寺、龍谷院境内に、立派なアジサイが

開花し多くの参拝者に観賞して頂きましたことは、大きな喜びとなりました。

今年も、龍谷院の繁栄を切に祈り、菩提寺の護持に努めてまいりますので、皆様の格別のご厚情ご協力を心からお願い申し上げます。

おわりに、檀信徒ご一同様のご健康とご繁栄をご祈念申し上げご挨拶いたします。

新年の御挨拶

総代 川野辺 博



年頭に当り謹んでお檀家崇敬者の皆様の、御健勝と御多幸を心からお祈り申し上げます。昨年は、東日本大震災。大津波。

原子力発電所の事故。更に台風の上陸。海外に於いてはタイ国の大洪水等、正に未曾有の大災害の年で有りました。被災された方々も、一日も早く復興され、

立直られる事を祈ります。

幸い私共の地域は被害も軽く平穏な新年を迎える事が出来ました事は皆様と共に喜びたいと思います。昨年は花の寺龍谷院の環境整備のために、世話人様、梅花講の皆様は五月、七月と二度に亘り境内の草刈等で汗を流して戴きました。本当に御苦労様でした。今年も、見事な花が咲くのが楽しみです。今後共よろしくお願い致します。

本年も皆様の実りある一年となる事を願って新年の御挨拶と致します。

新年のご挨拶

総代 石崎 貞夫



新年明けましておめでとうございます。平成二十四年の年頭にあたり、総代といたしまして謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

菩提寺龍谷院は秀峰存岱和尚様が創建され、五百三十三年をお迎えいたしますが、檀信徒の皆さまには、菩提寺であります龍谷院の維持と円滑な運営に多大な各ご協力を賜りまして誠にありがとうございます。これも一重に、常日頃から、当山を菩提寺として大切に育んでいただいている賜物と感謝申し上げます。今後、皆さま種々の法要や募参りなどにお越しの際、より良い環境とするためにも菩提寺の整備を推進してまいりたいと考えております。皆さまには何かとご迷惑をおかけいたしますが、何卒、このような趣旨につきまして、これからも変わらぬご理解とご協力の程よろしくお願い申し上げます。昨年は、大きな災害に見舞われ、多くの檀信徒の皆さまの中には、被災され、厳しい年を過ごされた方もいらっしゃると思いますが、今年は幸多く竜の如く大きく飛躍する素晴らしい一年でありますようご祈念申し上げます。年頭のごあいさつといたします。

当山四十三世中興栄重宗天大和尚 七回忌法要



去る十二月十日(土) 前任職
蘭部栄重和尚の七回忌法要が執
り行なわれました。

導師に水戸市祇園寺住職小原
宣弘老師をお願いし、総代役員、
梅花講員、ご近所の近親者で厳
粛に報恩供養が営まれました。

栄重和尚は大正十年に栃木県
益子町の在家に生まれ、出家僧

として龍谷院の住職を約五十五
年間に亘り務めました。その間、
本堂再建から始まり、客殿、観
音堂等のすべての建物を建替え
られました。龍谷院は見違える
程、美しい寺になりました。こ
れひとえに前任職のおかげと感
謝するところです。



寺院を訪ねて(四) 石岡市 泰寧寺

当寺は山号を霊石山、寺号を
泰寧寺と称する。寺は永正六年
(一五〇九) 創立。開基は石塚
城主、佐竹之連枝義高で、本寺
龍谷院開山秀峰の弟子である天
海を請し、石塚村(現城里町)

地所は上地となり、維持困難と
なるが、明治二十五年檀徒より
畑、山林等寄付さる。大東亜戦
中、六地藏浮彫りの梵鐘は拠出
された。昭和五十五年、三十五
世中興玄祥代に現在の本堂が建
立さる。なお、泰寧寺の住職は
現在三十七世になる。

本尊 聖観世音菩薩

称号 南無本師釈迦牟尼陀佛

に伽藍を建立し開創となす。の
ち天正二年(一五八四) 八世源
初代、開基家の石塚佐竹義国が
新治郡片野村に移り、当寺も同
地(現地)に移転となる。しか
し慶長七年(一六〇二) 義国は
佐竹義宣とともに出羽久保田(秋
田県)に移り、元和元年(一六
一五) 下総守滝川三郎兵衛源雄
利が片野城主となり、その帰依
を受く。慶安元年(一六四八)、
徳川幕府より御朱印二〇石を賜る。
享保十年(一七二五)、十八世
全明代に梵鐘を鍛造す。嘉永二
年(一八四九) 火災により本堂、
庫裡、鐘樓堂、山門等焼失し、
安政四年(一八五七) に再建さ
る(現在の庫裡)。明治に入り



龍谷院の行事

一、チャリテイゴルフ大会



参加者の皆様

十月二十日、第五回龍谷院チャリテイゴルフ大会を開催。会場を桂ヶ丘カントリークラブで参加者七組と大勢参加のもと行われました。第五回大会の優勝者は、城北工機社長関信彦様でした。

二位 青山達典様
三位 松本活道様
○大会への寄付者
賞品多数 橋本 茂様

二、檀信徒研修旅行

期日 十月二十五日～二十七日
今年が大本山総持寺ご移東百周年記念の年であります。以前は石川県能登半島の輪島近くに

賞品 炊飯ジャー 小幡利克様
金一封 江幡照夫様
金一封 城北工機 関 信彦様
賞品 石鉄石材店様
賞品 広木石材様
賞品 花の寺めぐり会様
協賛金 平塚正光様
協賛金 オケキ佛具店様
金一封 石崎貞夫様



参加者の皆様



精進料理



総持寺祖院

永光寺五老峯



永光寺五老峯

あり、明治に火災で全焼してしまいました。これを機会に横浜の鶴見に移転して今年で百年となります。その記念として大本山総持寺祖院を訪ねる旅行が企画され、龍谷院からも六名が参加致しました。

三、開山忌

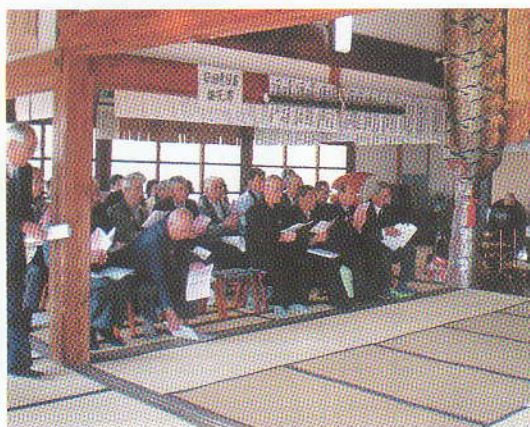
十一月一日、恒期当山開山忌（四百九十六回忌）法要が修行されました。布教師は茨城県稲敷市養泉寺ご住職米田隆泰老師に来ていただきました。

四、第一教区護持会総会

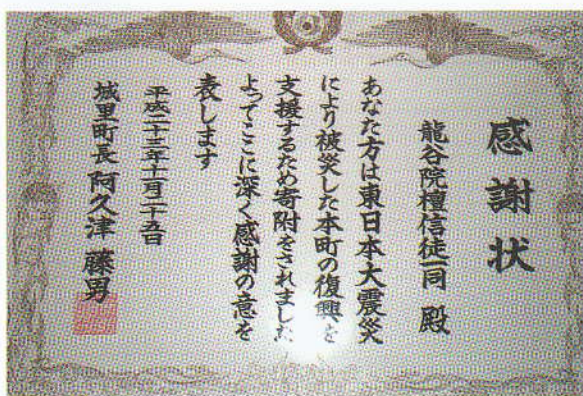
十一月二日日本山より管長代理の特派布教師は兵庫県からお越しの平和宏昭老師。法話『励もう五つの修行』を聞法した。各寺院の役員さま約八十名が参加し、龍谷院より総代二名が出席をした。会場は水戸市大足町安



國寺さまでした。



五、城里町より表彰



感謝状

十一月二十五日城里町福祉協議会大会に於て「龍谷院檀信徒一同」が感謝状をいただきました。これは東日本大震災の義援金を町へ寄付したためであります。（ゴルフ大会、梅花講員、総代一同、龍谷院、慈雲寺）



阿久津町長と参加者

六、梅花流奉詠大会

十一月十八日、土浦市民文化センターにおいて第三十回梅花流茨城県奉詠大会が行なわれた。清興に浪曲師 天中軒 轟師を迎え楽しい一日を過ごした。



登壇中の講員のみなさん

祠堂牌 受付中

従来の祠堂牌は七万円
(三十年前が五万円)



永代供養牌 十五万円
(但し、お骨の預かりは別となります。)

申し込みいただいた祠堂牌は位牌堂に祠ります。

申込先 龍谷院 〇二九—二八九—三二〇八

第6回 龍谷院チャリティーゴルフ大会開催
— 参加者募集中 —

開催日 平成24年5月25日(金)友引

場 所 桂ヶ丘カントリークラブ

参加費 3,000円

※プレー費は各自負担
※締切り5月10日(木) ※豪華賞品の用意あり
※ゴルフ場が変更になる場合もありますのでご了承下さい。



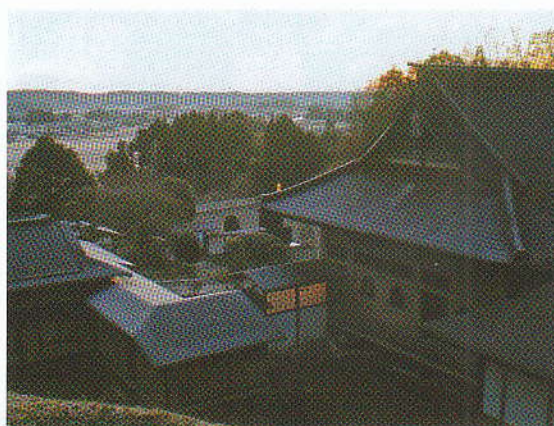
平成24年度
節分会募集

平成24年2月3日(金)
午後2時より

豆まき 1万円 星祭 3千円

申込は世話人さま、又は龍谷院まで

『編集後記』



一ページの写真は龍谷院の裏山から日の出の瞬間を撮影したものです。本堂の屋根らしいものしか見えません。それが、数分後にはこの写真のように、院全体の姿が見えるようになります。しかし曙光は見えなくなってしまう。ご先祖栄重宗天大和尚の七回忌、在りし日のお姿が偲ばれるとともに、歳月の流れの速さに驚かされます。去年は未曾有の大震災に見舞われましたが、今年辰年、龍が天に昇る勢いで災害から復興し、景気が上昇することを願わずにはおられません。

編集委員

稲川 清
杉山三千雄